角 遠足のバス分数で繋がりぬ

角 助詞があり助動詞があり地虫出づ

角 参道の芽吹きたちまち踏まれたる

角 情熱も少し暑さに弱くとも

角 万葉の子孫百葉箱の夏

角 冷奴に葱と醤油や無位無冠

角 ゆふぐれの唄こうもりの子守唄

角 兄弟の大手を振つて天高し

角 聞き役の任を解かれし墓洗ふ

角 里は丸く山は長しよ芋の秋

角 灰になり土に紛れて春を待つ

角 遠足のバスに分数表記あり

角 参道の芽吹たちまち踏まれけり

角 情熱の少し暑さに弱くとも

角 万葉の裔の百葉箱の夏

角 冷奴に醤油垂らして無位無冠

角 天高し大手を振つて行くべかり

角 聞き役の任を解かれし墓洗ふ

角 里は丸く山は長しよ芋の秋

角 灰になり土に紛れて春を待つ

角 凍豆腐大豆の色に戻りけり

角 難しき漢字は苦手カキフライ

角 参道の芽吹たちまち踏まれけり

角 情熱や多少暑さに弱くとも

角 万葉の裔の百葉箱の夏

角 聞き流す毀誉褒貶の冷奴

角 日に水に砂に機械に時の日よ

角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

角 天高し大手を振つて足上げて

角 聞き役の任を解かれし墓洗ふ

角 里は丸く山は長しよ芋の秋

角 凍豆腐大豆の色に戻りけり

角 揚げ立てのからり仮名書きカキフライ

角 灰になり土に紛れて春を待つ

角 情 熱や多少暑さに弱くとも 角 凍豆腐大豆の色に戻 りけり

角 万 葉 の 裔 の 百 葉 箱 の 夏 角 揚げ立てのからり仮名書きカキフライ

広 島 も 長 崎 も 炎天下 な IJ 角 中元のタオルそのまま年を越す

角

角 立ち眩む如く西日の沈み ゆ Ś 角 も 清 遊

紫 も び し 双 六 と

角 聞 き 流 す毀 誉 褒 貶 の 冷 奴 角

山火事に超然たるや大瀑布 角 灰になり土に紛れて春を待つ

角 日に水に砂に機械に時の日よ

角

今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

角 天高し大手を振つて足上げて

角 聞き役の任を解かれし墓洗ふ

角 里 は 丸く Щ には長 しよ芋 の 秋

角 み んな家中電気で動く冬籠

角

制

服

ゃ

中

高

貫

校

の

春

角

シャクシャクと水の硬さよ梨噛る

角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ 天高 聞き役の任を解か 立ち眩む如く西日の沈みゆく 日に水に砂に機械に時 山 情 里は丸く山は長しよ芋の秋 聞き流 広 万 .火事 熱や 島 葉 し大手を振つて足上げて も の に 多少暑さに弱 す 長 超 裔 毀 崎 然 の 誉 も たるや 百 炎 褒 れ 葉 貶 天 し墓洗 箱 の 下 大瀑 くと の 冷 の な 日よ も 奴 夏 i) 布 ふ 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 揚げ立てのからり仮名書きカキフライ 中元のタオルそのまま年を越す 灰になり土に紛れて春を待 中心は取り込み中の南瓜 男爵に出世の薯ぞ目出度け 湯豆腐や葱も生姜も花 凍豆腐大豆の色に戻 みんな家中電気で動く冬籠 初 紫 檻 紅 も 々 葉 清 に や も 動 も 遊 物 水 び 園 底 し の の 双 息 りけ か 六 白 かな つ ح 枚 i) を し れ

角 角 角 角 情 広 万 制 熱や 島 葉 服 も ゃ の 多 長 中 裔 少暑さに弱 崎 の 高 も 百 炎 葉 貫 天 箱 校 下 くと の な 夏 も i) 春 角 角 角 角 み 湯 中 檻 んな家 豆 心 々 腐 は に や 混 〉中電· 動 葱 線 も 物 中 気で 生 粛 の 姜 の 南 動 も 息 瓜 く冬籠 鰹 白 か 節 な も し

角 聞 き 流 す 毀 誉 褒 貶 の 冷 奴 角 揚げ立てのからり仮名書きカキフライ

角

山火事に超然たるや

大瀑

布

角

凍豆

腐大豆の色に戻

りけ

I)

角 天高. 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ し大手を振つて足上げて 角 中元のタオルそのまま年を越す 初 紅 葉や も水底の一二枚

角

角 聞き役の任を解か れ し墓洗 ふ 角 紫 も 清 も 遊 び し 双 六 と

角

角 里 は 丸く山 は長 しよ芋 の 秋 角 灰になり土に紛れて春を待つ

角 角 シャクシャクと水の結晶梨噛 男爵に出世の薯ぞ目出度けれ る

制 服 貫 校 春

角 中心 の 混沌たり Ĺ 南 瓜 か な

角

雑

草

の

高

々

枯

れ

て

植

木

鉢

角 情 熱や 多少暑さに弱 くと も 角

角

の

中

高

の

二三枚 水 に 沈 み し 初 紅 葉

角

中元のタオルそのまま年を越す

角 広 島 も 長 崎 も 炎 天 下 な I)

角

万

葉

の

裔

の

百

葉

箱

の

夏

角

竹

林

の

番

端

の

寒

z

か

な

角

紫

も

清

も

遊

び

し

双

六 と

角 石投げて古池を割る寒さか

な

角

灰になり土に紛れて春を待

つ

角 山火事に拘りの 無き大瀑 布 角 植木鉢春の出番を待つてゐる

角

聞

き

流

す

毀

誉

褒

貶

の

冷

奴

角

檻ごとに

動

物

達

の

息

白

し

角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

角

檻に毛もの檻の外には毛皮人

角 天高. し大手を振つて眉上げて

角

み

んな家中電

気で

動

でくを籠

角 聞き役の任を解か れし墓 洗 ż

角

湯

豆

腐や

葱

も

生姜

も

鰹

節

も

角 里 は 丸く山 は長、 しよ芋の 秋

角

角

男 爵

の出世目出度し薯

の

秋

シャクシャクと水の結晶梨噛 る

角 葱、 生姜、 辛子、

鰹節湯豆腐屋

凍 大 豆 の 色 に

りけ

i)

角 豆 腐 戻

角 揚げ立てのからり仮名書きカキフライ

角 制 服 の 中 高 貫 校 の 春

角 男 爵 0) 出 世 目出 ...度 し 薯 の 秋

角

紫 も

清 も 遊 び

し

双

六

と

角 柏 餅 の 柏 は 食 はず 残 し け i) 角 中 心 の 混 沌 たり U 南 瓜 か

な

角 情 熱 ゃ 多少暑さに 弱 くと も 角 石投げて古池を割る寒さか

角

万

葉

ග

裔

の

百

葉

箱

の

夏

角 編 集 の 加 減 乗 除 ゃ 文 化 祭

角

広

島

も

長

崎

も炎天下

な

I)

角

角 山火事の迫りつつある大瀑 布

角 聞 き 流 す 毀 誉 褒 貶 の 冷 奴

角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

角 聞き役の任を解か れし墓洗 ふ

し大手を振つて眉上げて

角 天高

角

角

里は丸く山は長

しよ芋の秋

角

シャクシャクと水の結晶梨噛 る

角 凍 豆

一腐大豆

の

色に戻

りけ

l)

角 揚げ立てのからり仮名書きカキフライ

中元のタオルセットを年用意

角 汗か ۲۱ て道をつけけ i) 雪 <u>,</u>の

角 炭屋消え炭団も失せて雪達 朝 磨

角 灰になり土に紛れて春を待

つ

な

竹 林 の 番 端 の 竹 の 凍 て

角 雑草の生えたるも枯 れ 植 木 鉢

角 檻ごとに 動 物 達 の 白 き 息

み んな家中電 気で 動 < 冬籠

角

湯 豆 腐 に 葱 も 生 姜 も 鰹 節 も

角

角 角 角 角 情 餅 制 万 熱 食う 服 葉 や暑 の の て 中 さに多少 裔 柏 高 の あ 百 ま 葉 貫 れ 弱 箱 校 IJ くと の の 柏 餅 夏 春 角 角 角 中 男 編 心 爵 集 の 0) の 出 混 加 世 沌 減 たり 目出 乗 除 度 U ゃ 南 し 文 薯 瓜 化 か の 祭 な 秋 角 角 角 汗か 炭屋消え炭団も失せて雪達 紫 も ۲۱ て道をつけけ 清 も 遊 び し ij 双 雪

<u>,</u>の

朝

磨

六

と

も 角 石投げて古池割るる寒さか な 角 灰になり土に紛れて春を待 つ

角 角 山火事の迫りつつある大瀑 聞 き 流 す 毀 誉 褒 貶 の 冷 奴 布 角 角 雑草の生えたるも枯 檻ごとに 動 物 達 の れ 白 植 き 木 息 鉢

角

広

島

も

長

崎

も炎天下

な

I)

角

竹

林

の

番

端

の

竹

の

凍

て

角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ 角 み んな家中電 気で 動 < 冬籠

角 角 天高 聞き役の任を解か し大手を振つて眉上げて れて墓洗 ふ 角 角 凍 湯 豆 豆 腐大豆 腐 に 葱 の も 色に戻 生 姜 も りけ 鰹 節 も l)

角 シャクシャクと水の結晶梨噛 る 角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ

角 里は丸く山は長 しよ芋の秋 角 中元のタオルセットよ年用意

角 角 角 角 角 角 山火事の迫りつつある大瀑 情熱や暑さに多少 餅 広 万 制 食う 島 葉 服 も長 の の て 中 裔 崎 柏 高 の も炎天下 あ 百 ま 葉 貫 れ 弱 箱 校 IJ くと な の の 柏 も 夏 餅 春 布 I) 角 角 角 角 角 角 古といふ字石といふ字や神無月 石投げて古池割るる寒さかな 男 竹 編 中 爵 林 集 心 の の の の 出世目出 種 加 番 減 の 端 乗 混 除や 沌 の 度 竹 た し薯 文 る の 化 南 凍 の 秋 て 祭 瓜 角 角 角 角 角 炭屋消え炭団も失せて 汗かいて道をつけけり雪の 中元のタオルセットよ年用 灰になり土に紛れて春を待つ 紫 も 清 も 遊 び し 双 雪達 六ぞ 朝 意 磨

角 角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ 聞き役の 今は お墓 ーを洗ふり 役 角 角 み 檻ごとに んな家 中 動 電 物 気で 達 の 動 白 <

角

聞

き流

す毀

誉

褒

貶

の

冷

奴

角

雑草の生えたるも枯れ

7.植木鉢

き

息

· 冬 籠

天高 し大手を振つて眉上げて 角 湯 豆 腐に 葱 も 生 姜 も 鰹 節 も

角

角 角 シャクシャクと水の結晶梨噛 里は丸く山は長しよ芋の秋 る 角 角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 凍 豆 腐 大 豆 の 色

に

戻

IJ

け

i)

角 制 服 の 中 高 貫 校 の 春 角

男 爵 の 出世目出 度 し薯 の 秋

角

紫 も 清 も 遊 び

し 双

六

ぞ

角 祭

角 角 情 広 熱や少し暑さに 島 も 長 崎 も 炎 天 弱 下 くとも な i)

角

角 山火事の迫りつつある大瀑布 角

角 聞 き 流 す毀 誉 褒 貶 の 冷 奴

角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

角 聞き役の 今は お 墓 を洗ふ 役

角 天高 し大手を振つて眉上げて

角 静動

角

里は丸く山は長しよ芋の秋

角 る

シャクシャクと水の結晶梨噛

る石、 竹、 水や添水鳴る

編 集 の 加 減 乗 除や 文 化

角

炭屋なく炭団なき世の雪達磨/自己模倣

角

万

葉

の

裔

の

百

葉

箱

の

夏

古といふ字石といふ字や神無月

角

灰になり土に紛れて春を待つ

角 投 石 に 古 池 割 る る 氷 か な

竹 林 の 番 端 の 竹 の 凍 て

角 雑草の生えたるも枯れ 植 木 鉢

角 檻ごとに 動 物 達 の 白き 息

角 み んな家中電 気で 動 でくを籠

角 湯 豆 腐に 葱 も 生姜 も 鰹 節 も

角 凍 豆 腐大豆 の色に戻 りけ l)

角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ

角 中元のタオルセットよ年用意

角

制

服

に

中

高

貫

校

の

春

角

男

爵

の

出世目出

一 度

し

薯

の

秋

角 角 角 角 角 角 角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ 山火事の迫りつつある大瀑布 情 聞き役の 聞 広 万 熱や少し暑さに き 島 葉 流 も の す毀 長 今は 裔 崎 の 誉 も お 百 炎 褒 墓 葉 貶 天 弱 を洗ふ 箱 の 下 くとも 冷 の な 役 奴 夏 I) 角 角 角 角 角 角 角 雑草の生えたるも枯れ植木鉢 凍 湯 み 投 竹 編 k 豆 豆 林 石 集 腐大豆 な家 腐に に の の 古 加 中電 葱も生姜 池 減 番 の色に 端 割 乗 気で 除 る の や 竹 る 戻 も 動 く冬籠 氷 文 り 鰹 0) か 化 け 節 凍 l) も て な 祭

角 里は丸く山は長しよ芋の秋角 シャクシャクと水の結晶梨噛る

角

静

動

る石、

竹、

水や添水鳴る

角

中元のタオルセットよ年用意

角

天高

し大手を振つて眉上げて

角

揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ

紫も清も遊びし双六ぞ

角

角 灰になり土に紛れて春を待

角 制 服 に 中 高 貫 校 の 春 角 里は丸く山は長 しよ芋の 秋 角 中元のタオルセットよ年用意

箱 の 夏 角 男爵 の 出世 目 出 度 し 薯 の 秋 角

紫 も 清 も 遊 び

し 双

六ぞ

角

万

葉

の

裔

の

百

葉

角 角 超 音 波 か も 蝙 蝠 の 子 守 唄 角 編 集 の 加 減 乗 除や

情熱や少し暑さに 弱 くと も 角 五で割 つて十一月に余り 文 化 無 祭 3

角

旅ゆけば雪また雪のユーラシア

角

灰になり土に紛れて春を待つ

角 角 山火事の迫りつつある大瀑 広 島 も長 崎 も炎天下 な IJ 布 角 角 竹 投石に古池 林 の 番 割る 端 の る 竹

氷

か

な

0)

凍

て

角 聞 き流 す毀 誉 褒 貶 の 冷 奴 角 雑草の生えたるも枯れ

角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ 角

み

んな家中電

気で

動

でくを籠

7.植木鉢

角 聞き役 の 今は お 墓 を洗ふ 役

角

湯

豆

一腐に

葱

も

生

姜

も

鰹

節

も

角 天高 し大手を振つて眉上げて

角

静動 の石、 竹、 水や添水 鳴る

角

シャクシャクと水の結晶梨噛る

角

鶴舞ふやその手羽元も手羽先も

角

凍

豆

腐大豆

の色に戻

りけ

l)

揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ

角

	角 鶴舞ふやその手羽元も手羽先も	角 シャクシャクと水の結晶梨噛る	
	角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ	角 静動の石、竹、水や添水鳴る	
	角 凍豆腐大豆の色に戻りけり	角 天高し大手を振つて眉上げて	
	角 湯豆腐に葱も生姜も鰹節も	角 聞き役の今はお墓を洗ふ役	
	角 みんな家中電気で動く冬籠	角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ	
	角 雑草の生えたる植木鉢も枯れ	角 聞き流す毀誉褒貶の冷奴	
	角 竹林の一番端の竹の凍て	角 山火事の迫りつつある大瀑布	
角 灰になり土に紛れて春を待つ	角 投石に古池割るる氷かな	角 広島も長崎も炎天下なり	
角 長旅の雪また雪のユーラシア	角 五で割つて十一月に余り無し	角 情熱や少し暑さに弱くとも	
角 福神のひいフウ、みいヨ、いつムウな	角 編集の加減乗除や文化祭	角 超音波かも蝙蝠の子守唄	
角 紫も清も遊びし双六ぞ	角 男爵の出世目出度し薯の秋	角 万葉の裔の百葉箱の夏	
角 中元のタオルセットよ年用意	角 里は丸く山は長しよ芋の秋	角 制服に中高一貫校の春	

角 制 服 に 中 高 貫 校 の 春 角 天 高 し大手を振 つ て大手

町

角

湯

豆

腐

に

葱 も

生姜

も

鰹

節

も

る内 裹 雛 角 水や添水鳴 る

角

凍

豆

腐

大豆

の

色に

戻

ŋ

け

IJ

角 角 超 万 音 葉 波 の か 裔 の 蝙 百 蝠 葉 の 箱 子 守 の 夏 唄 角 角

も

掘つて来し土龍に出会ふ蚯蚓かな 熱や少し暑さに 角 男 爵 0) 出世目

弱

くとも

角

情

角

角 広 島 も 長 崎 も 炎 天下 な IJ

角 山火事 の迫りつつある大瀑 布

角 聞 き 流 す 毀 誉 褒 貶 の 冷 奴

角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

角 夕立の昨日は降らず今日はまた

角

聞き役の今はお墓を洗ふ役

角

み

んな家中電気で動く冬籠

静動 るの石、 竹、

角

飾

ij

あ

る

内

の

裏な

シャクシャクと水の結晶梨噛る

角

揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ

里 一は丸 < 山 は 長 し ょ 芋 の 秋

角 編 集 0) 加 減 乗 除 や 文 化 祭 秋

出

度

し事

の

角

中元のタオルセットよ年用意

角

鶴舞ふやその手羽元も手羽先も

角 五で割つて十一月に余り無

角

紫

も

清

も

遊

び

し

双

六ぞ

う角

福神のひい、

ふ、う、

みい、

ょ

いつ、

なむ

角 古 池 や 石 も て 開 < 氷 面 鏡

角

長旅

の雪また雪

の

ユーラシア

角 古池 に石投げて 割 る 氷 か な

角

灰になり土に紛れて春を待つ

竹 林 の 番 端 0) 竹 0) 凍 て

角

角 雑草 の生えては枯るる 植 木

鉢

角

難民が飛行機で来て木の実割る

	角 竹林の一番端の竹の凍て	角 聞き流す毀誉褒貶の冷奴
角 灰になり土に紛れて春を待つ	角 古池や石もて開く氷面鏡	角 山火事の迫りつつある大瀑布
角 長旅の雪また雪のユーラシア	角 五で割つて十一月に余り無し	角 広島も長崎も炎天下なり
角 紫も清も遊びし双六ぞ	角 編集の加減乗除や文化祭	角 情熱や少し暑さに弱くとも
角 福神のひいふう、みいよ、いつむう、な	角 男爵の出世目出度し薯の秋	角 掘つて来て土龍の穴に蚯蚓落つ
角 中元のタオルセットよ年用意	角 里は丸く山は長しよ芋の秋	角 超音波かも蝙蝠の子守唄
角 鶴舞ふやその手羽元も手羽先も	角 シャクシャクと水の結晶梨噛る	角 万葉の裔の百葉箱の夏
角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ	角 静動の石、竹、水や添水鳴る	角 飾りある内の裏なる内裏雛
角 凍豆腐大豆の色に戻りけり	角 天高し大手を振つて大手町	角 制服に中高一貫校の春

角

夕立の昨日ふらざる分をけふ

角

みんな家中電気で動く冬籠

角

今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

角

雑草の生えては枯るる植木鉢

角

聞き役の今はお墓を洗ふ役

角

湯豆腐に葱も生姜も鰹節も

20 24
11
28
【角川俳句賞205A t-l
17
全275句】
選34句

角 制 服 に 中 高 貫 校 の 春 角

聞き役の今はお墓を洗ふ役

角

湯

豆

腐

に葱

も生姜

も

鰹

節

も

角 飾り á る 内 の 裏なる内 裹 雛

角

万

葉

の

裔

の

百

葉

箱

の

夏

角

大手 町

角

凍

豆

腐

大豆

の

色に

戻

ŋ

け

ij

角

角 超 音 波 か も 蝙 蝠 の 子 守 唄

角

シャクシャクと石細胞や梨噛

る

角

鶴舞ふやその手羽元も手羽先も

角 蚯蚓の穴が土龍の穴に出くはしぬ

角

角

数へ日の残りの日々を大切に

角 情 熱や少し暑さに 弱 くとも

角

角 山火事 の迫りつつある大瀑布 角

広

島

も長

崎

も

炎

天下

な

ij

角

蛸 壺 の 出るつもりなき出口かな 角

聞

き

流

す

毀

誉

褒

貶

の

冷

奴

今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

角

夕立の昨日ふらざる分もけふ

角

天高 し 大 手を振 つ て

静動の石、 竹、 水や添水鳴る

角

揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ

里は丸く山は長しよ芋の秋

角 男 爵 0) 出世目出 度 し薯 の 秋

角

中元のタオルセ

ツ

トよ年用

意

編 集 の 加 減 乗 除 や文 化 祭

角

福神のひいふう、

みいよ、

いつむう、

な

角 五で割つて十一月に余り無 し

角

紫

も

清

も

遊

び

し

双

六ぞ

古 池 や 石 も て 開 < 氷 面 鏡

角

長旅

の雪また雪

の

ユーラシア

竹 林 の 番 端 の 竹 の 凍 て

角

灰になり土に紛れて春を待つ

角

雑草の生えては枯るる植 木鉢

角

角

みんな家中電気で動く冬籠

12行3段組14ポ 204年11月28日 11 09 î 桐 10

12行3段組14ポ 204年11月28日 16 56

角 制 服 の 中 高 貫 校 の 春 角 聞き役の今はお墓を洗ふ役 角 湯

豆

腐に葱も生姜

も

鰹

節

も

î

桐 10

内の裏こそ内 裹 雛 角 天高 し 大 手を振つて 大手 町 角 凍 豆 腐 大豆 の 色に

角

飾り

á

る

角 万 葉 の 裔 の 百 葉 箱 の 夏 角

静動の石、 竹、 水や添水鳴る

角

揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ

戻

ŋ

け

ij

超 音 波 か も 蝙 蝠 の 子 守 唄 角 シャクシャクと石細胞の梨噛る

角

蚯蚓の道が土龍の穴の壁穿つ

角

角 里は丸く山は長 しよ芋の秋

角

中元のタオルセットよ年用意

角

鶴舞ふやその手羽元も手羽先も

角 情熱や少し暑さに弱 くとも

角

男

爵

の

誉

た

ま

は

る 薯

の

秋

角

数へ日の徒党を組んで来りけり

角

広島

も長

崎

も

炎天下

なり

角 編 集 の 加 減 乗 除 や文 化祭

角

福神のひいふう、みいよ、

いつむう、

な

角 山火事 の迫りつつある大瀑布 角

角 古 池 や 石 も て 開 < 氷 面 鏡

角

長旅

の雪また雪

の

ユーラシア

五で割つて十一月に余り無

し

角

紫

も

清

も

遊

び

し

双

六ぞ

角 蛸壺の出るつもりなき出口かな 角

聞

き

流

す

毀

誉

褒

貶

の

冷

奴

角 角 竹 林 の 番 端 の 竹 の 凍

角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

夕立の昨日ふらざる分までも

角

みんな家中電気で動く冬籠

角

雑草の生えては枯るる植

角 灰になり土に紛れて春を待つ

て

||木鉢

角 角 箱 新 書 の き 席 内と裏こそ内裏 と 教 室 春 の 雛 声 角 角 シャクシャクと石細胞の梨噛る

角 春塵のつもるつもりや辞書の上

角

大乗と自ら名乗る桜

か

な

角 万 葉 の 裔 の 百 葉 箱 の 夏

角

五で割

つて十一月に余り

無

角 角 土龍の穴の壁に蚯蚓が貌を出す 超 音波 かも 蝙 蝠 の子 守 唄

角 角 情熱や少し暑さに弱くとも 広 島 も長崎も炎天下な l)

角 角 山火事の迫りつつある大瀑布 聞 き流す毀 誉褒貶の冷 奴

角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ 蛸壺の出るに出られぬ訳でなし

角

角 夕立の昨日ふらざる分までも

角 角 天高 聞き役の今はお墓を洗ふ役 し大手を振つて大手 町

角

静動の石、

竹、

水や添水鳴る

里は丸く山は長しよ芋の秋

角 男 爵 の 誉たまはる薯の 秋

角 編 集 の 加 減 乗除や文 化 祭

角 古池や石もて開く氷 面

角 竹 林 の 一番 端 の 竹 の 凍 て 鏡

角 ミサイルのいまは冷たき筒の中

角 雑草の生えては枯るる植木鉢

角 角 湯 みんな家中電気で動く冬籠 豆 腐に葱も生姜も 鰹節も

角 凍豆腐大豆の色に戻りけ IJ

角 角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 鶴舞ふやその手羽元も手羽先も

角 中元のタオルセットよ年用意

角 角 福神のひいふう、みいよ、いつむう、な 数へ日は怒涛のごとし砕け散る

> 17行3段組14ポ 204年11月29日 05 46 î **~** 桐 10

角 角 角 角 長旅 灰になり土に紛れて春を待つ 本もまた雪崩れんとして春隣 紫 も の雪また雪のユーラシア 清 も 遊 び し 双 六 ぞ

角 角 角 春塵のつもるつもりや辞書の上 内といふ字裏といふ字や内裏雛 新 し き席 と教室春 の 山 角 角 角 シャクシャクと石細胞の梨噛る 里は丸く山は長しよ芋の 男 爵 の 誉 た ま は る 薯

角 角 超 万 音波かも 葉 の 裔 ഗ 蝙 百 蝠 葉 の 箱 子 守 の 夏 唄

角

大

乗

を

自ら

唱る

桜

か

な

角 角 情熱や少し暑さに弱 広 島 も長 崎 も炎天下な くとも IJ

角

土龍の穴の壁に貌出す蚯蚓かな

角 山火事の迫りつつある大瀑布 貶の冷

角

聞き流す毀

誉

褒

奴

角 蛸壺の出るに出られぬ訳でなし

角 夕立や昨日ふらざる分までも 角

今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

角

揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ

角 天高 し大手を振つて大手 町

角 角 静動の石、 聞き役の 今は 竹、 お墓を洗 水や添水鳴る ふ 役

秋

角 編 集 の 加 減 乗除や文 化 の 祭 秋

角

灰になり土に紛れて春を待つ

角 五で割つて十一月に余り無 U

角 古池や石も て開く 氷 面 鏡

角 竹 林 の 番 端 の 竹 の 凍 て

角 ミサイルのいまは冷たき筒の中

角 雑草の生えては枯るる植木鉢

角 角 湯 みんな家中電気で動く冬籠 豆腐に葱も生姜も 鰹 節 も

角 凍豆 腐大豆 の色に戻 りけ I)

角 鶴舞ふやその手羽元も手羽先も

角 お中元のタオルセットよ年用意

角 数へ日が怒涛のごとく砕け散る

角

福神のひいふう、みいよ、いつむう、な

角 角 角 長旅の雪また雪の 本もまた雪崩るる如 紫 も 清 も 遊 び ユーラシア し 双 し 六ぞ 春隣

選43句

角 角 客船は異 新 U き 席 国 と 教 の春を伝へけり 室 春 の 山

角 春塵のつもるつもりや辞書の上

角 内といふ字裏といふ字や内裏雛

角

電

柱

の

柱

は

丸

し

春

燈

角 大 乗 を自ら唱ふ 桜 か な

角 角 超 東 西の 音 波 か 都、 も 日 蝙 暮 蝠 の の 花 子 守 の 唄 雨

角

U

角 土龍の穴の壁に貌出す蚯蚓かな

角 情熱や少し暑さに弱くとも

角 万 葉 の 裔 の 百 葉 箱 の 夏 角

広

島

も長崎も炎天下な

ŋ

角 山火事 の迫りつつある大瀑 布

角 角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ 聞 き流 す毀 誉 褒 貶 の 冷 奴

角 夕立や昨日ふらざる分までも

角

天高し大手を振つて大手町

角 聞き役の今はお墓を洗ふ役

角 静動の石、竹、水や添水鳴る

角 シャクシャクと石細胞の梨噛 る

角 里 は丸く山は長 しよ芋の 秋

角 男 爵 の 誉たま は る 薯 の 秋

角 五で割つて十一月に余り無 編 集 の 加 減 乗除 や文 化 祭

角 竹 林 の 番 端 の 竹 の 凍 て

角 古 池 や 石 も て 開 く 氷 面 鏡

角 角 ミサイルのいまは冷たき筒の中 雑草の生えては枯るる植木鉢

角 みんな家中電気で動く冬籠

角 湯 豆 一腐に 葱も生姜も 鰹 節 も

角 角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 凍 豆 腐 大豆 の 色に 戻 りけ l)

角 角 お中元のタオルセットよ年用意 鶴舞ふやその手羽元も手羽先も

17行3段組14ポ 2024年11月30日 17:00〈1 〉桐10

角 角 角 角 角 角 角 角 角 福神のひいふう、みいよ、いつむう、 数へ日が怒涛のごとく砕け散る 雪の山将棋を立てしごと並ぶ 長旅の雪また雪の 灰になり土に紛れて春を待 雪 雪の夜の仏に迫る火の 本 紫 国 棚 も の朝湯に浸る雪見かな の 清 我に雪崩るる も 遊 び ユーラシア し 双 六 春 勢 _ 隣 ぞ ひ な つ

選43句

角 新 しき席と教室春 の 山

角

客船は祖国の春を伝へけ

ij

春塵のつもるつもりや辞書の上 角

角

角 内と置き裏と続けて内裏 雛

角

電

柱

の

柱

は

丸

し

春

燈

角 大 乗 を 自 ら 唱ふ 桜 か な

角 角 超 都 音 を 波 ば か 東 も に 蝙 遷 蝠 す の 花 子 守 の 聝 唄

角 土龍の穴の壁に貌出す蚯蚓かな

角 角 情熱や少し暑さに弱くとも 広 島 も長崎も炎天下な ŋ

角 万 葉 の 裔 の 百 葉 箱 の 夏

角 山火事 の迫りつつある大瀑 布

角 聞 き流 す毀 誉 褒 貶 の 冷 奴

角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

角 角 夕立や昨日ふらざる分までも 天高し大手を振つて大手町

> 角 聞き役の今はお墓を洗ふ役

角 静動の石、竹、水や添水鳴る

シャクシャクと石細胞の梨噛る

角 里 は丸く山は長 しよ芋の 秋

角 男 爵 の 誉た ま は る 薯 の 秋

乗除や文

角 角 五で割つて十一月に余り無 編 集 の 加 減 化 祭 U

角 竹 林 の 番 端 の 竹 の 凍 て

角 古 池 や 石 も て 開 く 氷 面 鏡

角 角 ミサイルのいまは冷たき筒の中 雑草の生えては枯るる植木鉢

角 みんな家中電気で動く冬籠

角 湯 豆 一腐に 葱も生姜も 鰹 節 も

角 角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 凍 豆 腐 大豆 の 色に 戻 りけ l)

角 角 お中元のタオルセットの年用意 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も

> 角 角 数へ日が怒涛のごとく砕け散る 灯台は初日を受けて輝け り

角 角 福神のひいふう、 紫 も 清 も みいよ、いつむう、 遊 び し 双 六ぞ な

角 長旅の雪また雪のユーラシア

角 雪の山将棋を立てしごと並ぶ

角 雪国 の朝湯に浸る雪見かな

角 角 灰になり土に紛れて春を待つ 雪 の 夜 の 仏に迫る 火の 勢 ひ

17行3段組14ポ 2024年12月1日 22:22〈1〉桐10

選42句

角 角 角 取り出だす内の裏なる内裏 客船は異国の春を伝 新 しき席と教室 春 へけ の 雞 ij 山

角 電 柱 の 丸 き 柱 や 春 燈 角

春塵のつもるつもりや辞書の上

角 都 を ば 東 に 遷 す 花 0) 雨

角

大

乗

を

自

5

唱ふ

桜

か

な

角 角 土龍の穴の壁に貌出す蚯蚓かな 超 音 波 か も 蝙 蝠 の 子 守 唄

角 情 熱や少し暑さに 弱 くとも

角 万 葉 の 裔 の 百 葉 箱 の 夏 角

広

島

も長

崎

も炎天下

な

i)

角 角 山火事 夕立や昨日ふらざる分までも の迫りつつある大瀑 布

角 聞 き流 す毀 誉 褒 貶 の 冷 奴

角

揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ

角 角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ 天高し大手を振れば大手町

> 角 角 静動の石、 聞き役の今はお墓を洗ふ役 竹、 水や添水鳴 る

> > 17行3段組14ポ 2024年12月2日 13:16

î ~

桐 10

角 角 シャクシャクと石細胞の梨噛 里 は丸く山は長 しよ芋の 秋 る

角 男 爵 の 誉 た ま は る 薯 の 秋

角 角 五で割つて十一月に余り無 編 集 の 加 減 乗除 や文 化 祭 U

角 竹 林 の 番 端 の 竹 の 凍 て

角 古 池 ゃ 石 も て 開 < 氷 面 鏡

角 ミサイルのいまは冷たき筒の中

角 角 雑草の生えては枯るる植木鉢 みんな家中電気で動く冬籠

角 湯 豆 一腐に 葱も生姜も 鰹 節 も

角 凍 豆 腐 大豆 の 色 に 戻 IJ け l)

角 角 お中元のタオルセットの年用意 灯台は神の依 代初日の 出

> 角 角 角 角 角 角 角 角 福神のひいふう、 雪の 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も 長旅の雪また雪のユーラシア 灰になり土に紛れて春を待 雪 雪 紫 の夜の 国 も 山将棋を立てしごと並ぶ の 清 朝湯に浸る雪見かな も 仏に迫る火の 遊 みいよ、 び し いつむう、 双 六ぞ 勢 ひ つ な

17行3段組14ポ 2024年12月3日 13:34

î ~

桐 10

村人は別 の名で呼ぶ春 の 山 角 聞き役の今はお墓を洗ふ役

角

角 新 しき 席 と 教 室 春 の 山

角 角 春塵のつもるつもりや辞書の上 蓋とれ ば 内 の 裏なる内 裹 雛

角 電 柱 の 柱 は 丸 し 春 燈

角 大 乗 を 自 ら 唱ふ 桜 か な

角

ひんがし

へ都を遷す花

の

雨

角 超 音 波 か も 蝙 蝠 の 子 守 唄

角 角 土龍の穴の壁に貌出す蚯蚓かな 情 熱や少し暑さに 弱 くとも

角 広 島 も長 崎 も炎天 下 な IJ

角 万 葉 の 裔 の 百 葉 箱 の 夏

角 角 山火事 夕立や昨日ふらざる分までも の迫りつつある大瀑 布

角 聞 き流 す 毀 誉 褒 貶 の 冷 奴

角 角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ 秋晴の大手を振つて大手町

角 静動の石、 竹、水や添水鳴 る

角 シャクシャクと石細胞の梨噛 る

角 里 は丸く山は長 しよ芋の 秋

角 男 爵 の 誉 た ま は る 薯 の 秋

角 角 五で割つて十一月に余り無 編 集 の 加 減 乗 除 や文 化 祭 U

角 吹きすさぶ気圧の谷の寒さか な

角 竹 林 の 番 端 の 竹 の 凍 て

角 古 池 や 石 も て 開 < 氷 面 鏡

角 角 ミサイルのいまは冷たき筒の中 雑草の生えては枯るる植木鉢

角 み んな家中電気で動 で多籍

角 角 凍 湯 豆 豆 腐 腐 大豆 に 葱 も の 色に 生 姜 戻 も ŋ 鰹 け 節 I) も

角 角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ お中元のタオルセットの年用意

> 角 角 角 角 角 角 角 角 角 福神のひいふう、みいよ、 長き長き雪の列車をユーラシア 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も 雪の山将棋を立てしごと並ぶ 灰になり土に紛れて春を待つ 雪 雪 灯 紫 の 国 台 も 夜 の朝湯に浸る は 清 の 白 も 仏に迫る ١٧ 遊 依 び 代 し いつむう、 初 雪見 火 双 日 の 六 かな の 勢 ぞ 出 ひ な

17行3段組14ポ 2024年12月6日

09 42

〈1 〉桐10

暖 か や 前 足 の あ る赤 ん 坊

角

角 蓋とれば内の裏なる内裏 雛 角

角 春塵のつもるつもりや辞書の上

角 ひんがしへ都を遷す花 0 列

角

大

乗

を

自ら

唱

Š

桜

か

な

角

電

柱

の

柱

は

丸

し

春

燈

角 土龍の穴の壁に貌出す蚯蚓か の子守 な

角

超音波かも

蝙

蝠

唄

角

五で割つて十一月に余り無

U

角 広 島 も長 崎 も 炎天下 な ŋ

角

情

熱や少し暑さに

弱

くとも

角 万 葉 の 裔 の 百 葉 箱 の 夏

角 角 山火事の迫りつつある大瀑 夕立や昨日ふらざる分までも 布

角 聞 き 流 す 毀 誉 褒 貶 の 冷 奴

角 角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

角 秋晴 か りそめの鯖 の大手を振つて大手 や鰯 や秋 0) 雲 町

> 角 聞き役の今はお墓を洗ふ役

角 シャクシャクと石細胞の梨噛 静動の石、 竹、水や添水鳴 る る

角 里 は丸く山は長 しよ芋の 秋

角 男 爵 の 誉た ま は る 薯 の 秋

角 編 集 の 加 減 乗除 や文 化 祭

角 風かよふ気圧の谷の寒さか

角 竹 林 の 番 端 の 竹 の 凍 て な

角 古 池 や石も て 開 < 氷 面 鏡

角 ミサイルのいまは冷たき筒の中

角 角 雑草の生えては枯るる植木鉢 み んな家中電気で動 く冬籠

角

角 冬 眠 の 叶 は ぬ 雀 庭 に 来 る

角 水 圧 の 中に 大 きな 鯨 か な

角 角 凍 湯 豆 豆腐 腐大豆の色に戻 に葱も生 姜 も りけ 鰹 節 i) も

> 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 福神のひいふう、みいよ、 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 雪の 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も ひねられし蒟蒻のあるおでんかな 長き長き雪の列車をユーラシア お中元のタオルセットの年用意 灰になり土に紛れて春を待つ 雪 雪 灯 紫 っ 国 台 も 山将棋を立てしごと並ぶ 夜の仏に迫る の は 清も 朝湯に浸る雪見かな 白 ļ 遊びし双六ぞ 依 代 いつむう、 初 火 日 の 勢 の 出 ひ な

角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 半 袖 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ 土龍の穴の壁に貌出す蚯蚓かな 夕立 春塵のつもるつもりや辞書の上 えんやらやとは立 山 情 ひんがし 蓋とれ 聞 超 暖 広 大 万 電 火 熱 き 音 か 島 乗 葉 や昨日ふらざる分までも 事 の 柱 や少し暑さに 流 や 波 も長 炊事 の を の迫りつつある大瀑 ば ഗ 前 す毀 か 裔 へ都 自 内 足 崎 柱 も ら の の 洗濯 誉 も の 蝙 は を遷す花 裏 唱 百 炎 あ 褒貶の 蝠 丸 なる内 Š 葉 春の鬼 天 る の 弱 掃 し 箱 桜 下 赤 子 くとも 除 春 冷 な か の 守 ん ケ島 裹 か 0 奴 夏 i) 列 坊 唄 な 燈 雛 な 布 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 ラーメンのスープ飲み干す神無月 シャクシャクと石細胞の梨噛 静動 ミサイルのいまは冷たき筒 風かよふ気圧の谷の寒さかな 雑草の生えては枯るる植 丁 五 秋 み 里 聞き役の かりそめ 古 竹 編 男 で割つて十一月に余り 晴 んな家中電気で動く冬籠 度いい感じの十二月始 は丸く山は長 爵 林 池 集 の石、 の大手を振 の ഗ ゃ の 誉 石 加 今は の 竹、 番 た も 減 鯖 ま 端 て 乗 や鰯 お 水や添水 除 は 開 の 墓 しよ芋 つて大 竹 や る < を や 文 薯 氷 0) 洗 秋 化 木鉢 の 凍 の 無 鳴 手 面 ふ の の中 秋 鏡 て 祭 秋 る 役 雲 る 町 め し

角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 福神のひいふう、 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 雪の 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も ひねられし蒟蒻のあるおでんかな 長き長き雪の列車をユーラシア お中元のタオルセットの年用意 灰になり土に紛れて春を待 凍 湯 大 雪 雪 灯 冬 紫 いなっ の 国 台は 豆 豆 眠 も 山将棋を立てしごと並ぶ 腐 腐 夜 0) の 清 る水 朝 大 に 0 年 叶 も 湯 葱 豆 仏 中 は も 圧 に浸る みいよ、 に迫る 0) 遊 無 ぬ 色 生 お び 休 雀 に 姜 ほ し 庭 いつむう、 初 雪見 も 火 戻 い 双 日 に の な ŋ 鰹 六 かな の け 来 勢 節 る ぞ 鯨 出 つ ひ i) も る な

句

角 えんやらやとは立 春の鬼 ケ島 角 秋 晴 の大手を振

角 蓋とれ ば 内 の 裏 なる内 裹 雛 角

角

暖

か

や

前

足

の

あ

る

赤

ん

坊

角 春塵のつもるつもりや辞書の上

角 大 乗 を 自 ら 唱 Š 桜 か な

角

電

柱

ഗ

柱

は

丸

し

春

燈

角 角 ひんがし 超 音 波 か へ都 も 蝙 を遷す花 蝠 の 子 守 0 列 唄

角 土龍の穴の壁に貌出す蚯蚓かな

角 情 熱 や少し暑さに 弱 くとも

角 万 葉 <u>ഗ</u> 裔 の 百 葉 箱 の 夏 角

広

島

も長

崎

も

炎

天

下

な

IJ

角 山 火 事 の迫りつつある大瀑 布 角

半 袖

の

炊事

洗濯

掃

除

か

な

角 夕立 や昨日ふらざる分までも

角 聞 き 流 す毀 誉 褒貶の 冷 奴

角

今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

角 かりそめ の 鯖 や鰯 つて大 や 秋

手

町

の

雲

聞き役の 今は お 墓 を 洗 ふ 役

角 静動 の石、 竹、 水や添水 鳴 る

角 シャクシャクと石細胞の梨噛 る

角 里 は丸く山は長 しよ芋 の 秋

角

角 男 爵 の 誉 た ま は る 薯 の 秋

角 編 集 の 加 減 乗 除 や 文 化 祭

角 五 で割つて十一月に余り 無 し

角 角 ラーメンのスープ飲み干せ神無月 丁 度いい感じの十二月始 め

角 風かよふ気圧の谷の寒さかな

角 竹林 の 周辺に立つ竹 の 凍 て

角 角 ミサイルのいまは冷たき筒 古 池 ゃ 石 も て 開 < 氷 面 の中 鏡

角 角 雑草の生えては枯るる植 み んな家中電気で動く冬籠 ||木鉢

> 17行3段組14ポ 2024年12月7日 13 27 î ~ 桐 10

角 角 角 角 角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 蒟蒻に手の込んでゐるおでんかな 凍 湯 大 冬 いなっ 豆 豆 眠 腐 腐 の る水 大 に 叶 葱 豆 は 圧 も 0) ぬ 色 生 お 雀 に 姜 ほ 庭 も 戻 い に な ŋ 鰹 け 来 節 る 鯨 i) も る

角 角 角 福神のひいふう、 お中元のタオルセットの年用意 灯 台 は 年 中 みいよ、 無 休 初 いつむう、 日 の 出 な

角 紫 も 清 も 遊 び し 双 六 ぞ

角 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も

角 角 雪の 長き長き雪の列車のユーラシア 山将棋を立てしごと並ぶ

角 雪 国 0) 朝 湯 に浸る 雪見 かな

角 雪 の 夜 0 仏 に迫る 火 の 勢 ひ

角 灰になり土に紛れて春を待 つ

角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 土龍 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ 半 袖 春塵のつもるつもりや辞書の上 えんやらやとは立 夕立や昨日ふらざる分までも 山 情 入学の教室のみな見ず知らず 超音 蓋とれ 聞 縦 暖 広 万 電 火事 熱 か き 書 島 葉 の穴の壁に貌出す蚯蚓か の 柱 や少し暑さに 流 波 や も 0) 炊事、 の の迫りつつある大瀑 ば す毀 の 前 か 均 長 裔 内 柱 足 も 等 崎 の の 洗濯 誉 蝙 の も 割 は 裏 百 褒 あ 炎 の 蝠 丸 なる内 葉 春の鬼 (貶の 天 涼 の る 弱 掃除 し 箱 子 下 赤 し くとも 春 さよ 冷 の 守 ん な ケ島 裹 か 奴 夏 IJ 唄 燈 坊 な 雛 な 布 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 ミサイルのいまは冷たき筒の中 ラーメンの汁も飲み干せ神無月 シャクシャクと石細胞の梨噛 **惜気なく栗を潰してゐたりけ** 静動 竹林の近くの竹 風かよふ気圧の谷の寒さか 五で割つて十一月に余り無 秋 丁度いい感じの十二月始 本堂も仏も枯れて静けさよ 聞き役の かりそめ 古 里は丸く山は長 編 男 晴 爵 池 集 の石、 の大手を振 の ゃ の 誉 石 加 今は の 竹、 も た 減 鯖 ま て 乗 や鰯 お の凍 水や添水 開 除 は 墓 しよ芋 つて大手 る く や を や てて立 氷 文 薯 洗 秋 化 面 の の 鳴 ふ の 秋 鏡 な i) 祭 秋 る 役 雲 町 つ め る U

角

灰になり土に紛れて春を待

つ

角

雪

0)

夜

の

仏に迫

る

火

の

勢

ひ

角

雪

国

の

朝

湯に浸る

雪見

か

な

角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 福神のひいふう、 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 雪の 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も 長き長き雪の列車のユーラシア お中元のタオルセットの年用意 雑草の生えては枯るる植木 凍 み 湯 大 冬 灯 紫 豆 ļì んな家中電気で 豆 眠 台 も 山将棋を立てしごと並ぶ な 腐 腐 は 0) 清も 大豆 る水 に 年 叶 葱 中 は 遊 みいよ、 も 圧 の 無 ぬ 色に 生姜 び お 休 雀 ほ し 庭 いつむう、 初 戻 動く冬籠 も V 双 日 りけ に 鰹 な 六ぞ 来 の 節 る 鉢 出 IJ も 鯨 る な

角 角 えんやらやとは立春の鬼ヶ島 暖かや前足 の あ る赤 ん 坊 角 静動 の石、

角 春塵のつもるつもりや辞書の上 角

蓋とれ

ば 内

の

裏

なる内裏

雛

角 超音波 か も 蝙 蝠 の子 守 唄 角

電

柱

の

柱

は

丸

し

春

燈

角 情熱や少 し暑さに弱くと も

角

土龍の穴の壁に貌出す蚯蚓かな

角 万 葉 の 裔 の 百 葉 箱 の 夏

角 山火事の迫りつつある大瀑 布

角

半袖

の炊事、

洗濯

掃除

か

な

角 縦 書 の 均 等 割 の涼 しさよ

角 角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ 聞 き 流 す 毀 誉 褒 貶 の 冷 奴

角 秋 晴 の大 手を振つて大手 町

か りそめ の鯖 や鰯 ゃ 秋 0) 雲

角 角 聞き役の今は お墓を洗ふ 役

> 竹、 水や添水鳴

る

角 角 シャクシャクと石細胞の梨噛る 里は丸く山は長 しよ芋 の 秋

角 男 爵 の 誉 た ま は る 薯 の 秋

角 編 集 の 加 減 乗 除 や文 化 祭

角 情気なく栗を潰してゐたりけり

角 角 ラーメンの汁も飲み干せ神無月 五で割つて十一月に余り無 U

角 風かよふ気圧の谷の寒さかな

角 古池 や石もて開 < 氷 面 鏡

角 角 ミサイルのいまは冷たき筒の中 本堂も仏も枯れて静けさよ

角 雑草の生えては枯るる植 木鉢

角 角 み 冬 眠 んな家中電気で の 叶 は ぬ 雀庭 動 に く冬籠 来 る

角 角 湯 大いなる水 豆腐に葱も生姜も鰹節 圧 お ほ ٧١ な る も 鯨

> 17行3段組14ポ 2024年12月8日 23 27 〈1 〉桐10

角 角 角 角 角 角 福神のひいふう、 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ お中元のタオルセットの年用意 凍 灯 紫 豆 台 も 一腐大豆 は 清も 年 中 遊び みいよ、 の色に 無 休 し双六ぞ いつむう、 初 戻 日 りけ の 出 な り

角 角 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も 長き長き雪の列車のユーラシア

角 雪の 山将棋を立てしごと並ぶ

角 雪 国 の 朝湯に浸る雪見かな

角 雪の夜の仏に迫る火の 勢 ひ

角 冷房のビル、 家、 車、 広島よ

角

灰になり土に紛れて春を待つ

角 入 学 の 教室 の皆見ず知らず

角 竹林に外れし竹の凍てて立

角 寒 し寒し風吹く中の寒の雨

の

雲

角

冬

眠

の

叶

は

ぬ

雀

庭

に

来

る

桐 10

角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 土龍 春塵のつもるつもりや辞書の上 えんやらやとは立 冷房のビル、 入 学 情 蓋 超音 暖 電 とれ 熱 か 葉 の穴の壁に貌出す蚯蚓 柱 や の 波 や 少 教 ば の か 前 裔 室 内 し暑さに 柱 足 も 0) の 家、 蝙 の は 皆 裹 あ 蝠 見ず知らず な 丸 車、 葉 春の鬼 の る る内 弱 し 子 赤 くとも 広 春 守 ん ケ島 島 裏 か 唄 燈 坊 夏 ょ 雛 な 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 **惜気なく栗を潰してゐたりけ** 静動 五 シャクシャクと石細胞の梨噛 聞き役の今は 里 かりそめ 編 男 は丸く山は長 集 爵 の石、 の の 誉 加 <u>の</u> 竹、 減 た 鯖 乗 ま ゃ お 水や添水 除 は 鰯 墓を洗 しよ芋 や文 る や秋 薯 化 の ふ

の

秋

る

祭

秋

鳴

る

役

角

大

いなっ

る水

圧

お

ほ

い

な

る

鯨

角 角 角 ラーメンの汁も飲み干せ神無月 風かよふ気圧の谷の寒さかな 竹林に外れし竹の凍てて立つ 古 で割つて十一月に余り無 池 や石 も て 開 く 氷 面 鏡 i)

角

秋晴の大手を振つて大手

町

角

み

んな家中電気で動く冬籠

角

今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

角

雑草の生えては枯るる植

木

鉢

角

灰になり土に紛れて春を待

つ

角

聞

き

流

す

毀

誉

褒

貶

の

冷

奴

角

本堂も仏も枯

れ

て

静

けさよ

角

縦

書

0)

均

等

割

の

涼

し

さよ

角

ミサイルのいまは冷たき筒の中

角

半袖

の

炊事、

洗濯

掃除

か

な

角

万

0)

の

百

箱

の

角

山

火事

の迫りつつある大

瀑

布

角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 福神のひいふう、 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も 雪の 長き長き雪の列車のユーラシア お中元のタオルセットの年用意 湯 雪 雪 寒し寒し風吹く中の寒 凍 灯台は 紫 の 国 豆 豆 も 山将棋を立てしごと並 腐 夜 腐 0) 清 大 朝 に 0 年 も 葱 湯 豆 仏 中 に迫 に みいよ、 も 0) 遊 無 浸る 色 生 び 休 る に 姜 し いつむう、 初 雪 火 戻 も 双 日 見 の ŋ 鰹 六 の け 勢 か の 節 ぞ な 出 ぶ ひ 雨 i) も な

えんやらやとは立 春の鬼 ケ島 角 聞き役の今はお墓を洗ふ 役

角 蓋とれ ば 内 の 裏 なる内 裹 雛 角

暖

か

や前足

つか

ふ

赤

ん

坊

角

入学の教室すべて見ず知らず

角 電 柱 の 柱 は 丸 し 春 燈

春塵のつもるつもりや辞書の上

角

角

角 超音 波 か も 蝙 蝠 の 子 守 唄

角

土龍

の穴の壁に貌出す蚯蚓

か

な

角 冷房のご ビル、 家、 車、 広島 ょ

角 万 葉 の 裔 の 百 葉 箱 の 夏

角 半 袖 の炊事、 洗濯 掃除 か な

角 角 山火事 縦 書 0) の迫りつつある大瀑 均 等 割 の 涼 し さよ 布

角 聞 き 流 す 毀 誉 褒 貶 の 冷 奴

角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

角 角 秋 か 晴 りそめ の 大 、手を振 の鯖 や鰯 つて大手 や 秋 の 雲 町

角 静動の石、 竹、 水や添水鳴 る

角 シャクシャクと石細胞の梨噛 る

角 里 は丸く山 [は長 しよ芋の 秋

角 男 爵 の 誉 た ま は る 薯 の 秋

角 角 **惜気なく栗を潰してゐたりけり** 編 集 の 加 減 乗 除 や文 化 祭

角 渋柿も熟せば落る朱色か な

五で割つて十一月に余り無 U

角 角 ラーメンの汁も飲み干せ神無月

角 風かよふ気圧の谷の寒さかな

角 角 竹林の外側に立つ竹の 古 池 や 石 もて 開 < 氷 凍 面 鏡 7

角

雪の山将棋を立てしごと並ぶ

角 角 ミサイルのいまは冷たき筒の中 本 堂 も 仏 も 枯 れ て 風 強 し

角 角 雑草の生えては枯るる植 み んな家中電気で動く冬籠 木 鉢

> 17行3段組14ポ 2024年12月9日 15 39 î ~ 桐 10

角 角 角 角 角 角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ お中元のタオルセットの年用意 凍 湯 大いなる水 冬 豆 豆 眠 腐 腐 の 大豆 に 叶 葱 は 圧 も 0) ぬ 色 生 お 雀 に 姜 ほ 庭 戻 も ر ر に な ŋ 鰹 け 来 節 る 鯨 も る i)

角 角 福神のひいふう、 灯台は年 中 みいよ、 無 休 いつむう、 初 日 の 出 な

角 角 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も 紫 も 清 も 遊 び し 双 六 ぞ

角 長き長き雪の列車よユーラシア

角 雪 玉 の 朝 湯 に浸る 雪見 か な

角 雪 の 夜 0) 仏 に迫 る 火 の 勢 ひ

角 灰になり土に紛れて春を待 つ

ケ島 角 聞き役の今はお墓を洗ふ役

蓋とれ 暖 か や前足 ば 内 つか 裏 なる内 Ś 赤 ん 裹 坊 雛

角

角

の

角

えんやらやとは立春の鬼

角 入学の子らよおほかた見ず知らず

角 春塵のつもるつもりや辞書の上

角 切株 の丸く残りし春日か な

角 角 土龍の穴の壁に貌出す蚯蚓か 電 柱 の 柱 は 丸 し 春 燈 な

角 冷房のビル、 家、 車、 広島 ょ

角 万 葉 0) 裔 の 百 葉 箱 の 夏

角

ラーメンの汁も飲み干せ神無月

角

半 袖

の炊事、

洗濯

掃除

か

な

角 山火事 の迫りつつある大瀑 布

角 縦 書 0) 均 等 割 の 涼 し さよ

角 聞 き 流 す 毀 誉 褒 貶 の 冷 奴

角 角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

角 秋 か 晴 りそめ の 大 の鯖 手を振 や鰯 つて大手 や秋 の 雲 町

角

みんな家中電気で動く冬籠

角 静動の石、 竹、 水や添水鳴 る

角 シャクシャクと石細胞の梨噛 る

角 里 は丸く山は長 しよ芋の 秋

角 男 爵 の 誉 た ま は る 薯 の 秋

角 編 集 の 加 減 乗 除 や文 化 祭

角 **惜気なく栗を潰してゐたりけり**

角 渋柿も熟せば落る朱色か な

角 五で割つて十一月に余り無

角 風かよふ気圧の谷の寒さかな

角 竹林の外側に立つ竹の 凍 7

角 角 ミサイルのいまは冷たき筒の中 古 池 や 石 もて 開 < 氷 面 鏡

角 角 雑草の生えては枯るる植 本 堂 も 仏 も 枯 れ て 風 木 強 鉢 し

角

灰になり土に紛れて春を待

つ

17行3段組14ポ 2024年12月10日 06 49 î ~ 桐 10

角 角 角 凍 大いなる水 冬 豆 眠 腐 の 大豆 叶 は ഗ 圧 ぬ 色に お 雀 ほ 庭 戻 ٧١ に な り 来 け る 鯨 ょ IJ

角 角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 中元のタオルも出して年用意

角 年惜しむべく読み返す書ありけり

角 灯台は年 中 無 休 初 日 の 出

角 角 福神のひいふう、 紫 も 清 も みいよ、 遊 び し いつむう、 双 六 ぞ な

角 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も

角 水鳥の真つ赤に冷えし脚二本

角 角 長き長き雪の列車よユーラシア 雪の山将棋を立てしごと並ぶ

角 雪 国 0) 朝 湯 に浸る 雪見 かな

角 雪 の 夜 0) 仏 に迫る 火 の 勢 ひ

えんやらやとは立春の鬼 ケ島

角 暖 か や ·前足 つか ふ 赤 ん 坊 角

角

角 蓋とれ ば 内 の 裏 なる内 裹 雛

角 角 春塵のつもるつもりや辞書の上 入学やまだどの顔も見ず知らず

角 電 柱 の 柱 は 丸 し 春 燈

角 冷 房 のビル、 家、 車、 広 島 ょ

角

土龍の穴の壁に貌出す蚯蚓かな

角 万 葉 0) 裔 0) 百 葉 箱 の 夏

角 角 半袖 山火事 0 炊 の迫りつつある大瀑 洗 濯 掃除 か な 布

角 縦 書 の 均 等 割 の 涼 し け れ

角 聞 き 流 す 毀 誉 褒 貶 の 冷 奴

角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

角 秋 晴 の 大 手を 振 つて 大 手 町

角 角 聞き役の今は か りそ め の 鯖 お墓 ゃ 鰯 を洗ふ や 秋 0 役 雲

> 角 静動 の石、 竹、 水や添水鳴る

角 シャクシャクと石細胞の梨噛る 里 は丸く山 は長 しよ芋 の

角 男 爵 の 誉 た ま は る 薯 の 秋 秋

角 編 集 0 加 減 乗 除 や 文 化 祭

角 惜気なく栗を潰してゐたりけり

角 渋柿も熟せば落る朱色か な

角 五で割つて十一月に余り無

角 ラーメンの汁も飲み干せ神無月

角 風かよふ気圧の谷の寒さかな

角 竹林の外側に立つ竹 の 凍 て

角 古池や石もて 開く 氷 面 鏡

角 角 ミサイルのいまは冷たき筒の 本 堂 も 仏 も 枯 れ て 風 強 中 U

角 雑草の生えては枯るる 植 木 鉢

冬眠 み À な家 の叶は ?中電. ぬ 鳥は 気で 庭に来よ 動 く冬籠

角

角

17行3段組14ポ 2024年12月10日 20 23 î 桐 10

角 角 角 角 角 角 角 福神のひいふう、みいよ、 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 年惜しむべく読 中元のタオルもいざや年用 凍 大 灯 豆 V 台は年 腐大豆 なる水 中 庄 の み返す書ありけり 無 色に お 休 ほ いつむう、 初 戻 い 日 りけ な の る 出 意 鯨 な IJ

角 角 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も 紫 も 清 も 遊 び し 双 六 ぞ

角 角 水鳥 長き長き雪の列車よユーラシア の真つ赤に冷えし脚二本

角 雪の山将棋を立てしごと並ぶ

角 雪 玉 の 朝湯に浸る 雪見 か な

角 角 雪 灰になり土に紛れて春を待 の 夜 の火事は 仏に迫りつつ

ケ島

えんやらやとは春浅き鬼 暖かや赤子四つ足にて進 む

角

角

角 蓋とれ ば 内 の 裏 なる内 裹 雛 角 里 は丸く山

角 見ず知らずの同じ年ごろ入学す 角

角 春塵のつもるつもりや辞書の上

角 土龍の穴の壁に貌出す蚯蚓かな 電 柱 の 柱 は 丸 し 春 燈

角

角 万 葉 の 裔 の 百 葉 箱 の 夏

角

半 袖

の

炊

事

洗

濯

掃

除

か

な

角 山 .火事 の迫 りつつある大瀑 布

角 縦 書 0) 均 等 割 の 涼 し け れ

角 角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ 聞 き 流 す 毀 誉 褒 貶 の 冷 奴

角 冷房のビル、 家、 車、 広 島 ょ

角

本

堂

も

仏

も

枯

れ

て

風

し

角 秋 晴 の 大手を振 つて 大 手 町

角 角 聞き役の か りそ め 今は の 鯖 お墓 ゃ 鰯 を洗ふ ゃ 秋 0) 役 雲

> 角 静動 の石、 竹、 水や添水鳴る

角 シャクシャクと石細胞の梨噛る

男 爵 の 誉 た ま は る 薯 の 秋

は長

しよ芋

の

秋

角

中元のタオルよいざや年用

意

角 編 集 0 加 減 乗 除 や 文 化 祭

角 惜気なく栗を潰してゐたりけり

角 渋柿も熟せば落る朱色かな

角 ミサイルのいまは露けき筒の中

角 五で割つて十一月に余り無

角

鶴舞ふやその手羽先も手羽元も

角 ラーメンの汁も飲み干せ神無月

角 角 風かよふ気圧の谷の寒さかな 竹林の外側に立つ竹の 凍 7

角 古 池 や 石 も て 開 く 氷 強 面 鏡

角 雑草の生えては枯るる 植 木 鉢

角 角 冬眠 み À の叶は な家 ?中電. ぬ 鳥は 気で 庭に来よ 動 く冬籠

> 17行3段組14ポ 2024年12月11日 13 20 î 桐 10

角 角 角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 凍 大 豆 V 腐大豆 なる水 庄 の 色に お ほ 戻 11 りけ な る 鯨 i)

角 角 年惜しむべく読 灯 台は年 中 み返す書ありけり 無 休 初 日 の 出

角 角 福神のひいふう、 紫 も 清 も みいよ、 遊 び し いつむう、 双 六 ぞ な

角 水鳥 の真つ赤に冷えし脚二本

角 長き長き雪の列車よユーラシア

角 雪の山将棋を立てしごと並ぶ

角 雪 玉 の 朝湯に浸る 雪見 か な

角 角 雪 灰になり土に紛れて春を待 の 夜 の火事は 仏に迫りつつ

角 かりそめの鯖や鰯 や秋 の 雲 角

暖かや赤ちやん四つ足で進む 蓋とれ ば内の 裏なる内裏 雛 角 役割の石、竹、 水や添水鳴 る る

角

角

角

えんやらやとは浅春の鬼

ケ島

角 見ず知らずの同じ年ごろ入学す 角

角 春塵のつもるつもりや辞書の上

角 電 柱 の 柱 は 丸 し 春 燈

角

風

に集うてみたき街路

燈

角 土龍 の穴の壁に貌出す蚯蚓か な

角 角 半袖 万 葉 0 炊 の 裔 の 洗濯 百 葉 掃除 箱 の か な 夏

角 山火事 の迫りつつある大瀑 布

角

ラーメンの汁も飲み干せ神無月

角 角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ 聞 き 流 す毀 誉 褒 貶 の 冷 奴

角 冷房のビル、 家、 車、 広 傷よ

角 縦 書 の 均 等 割 の 涼 し け れ

角 角 爽やかやテニヲハといふ潤滑油 秋 晴や漢字と仮名を携 ^ て

角 シャクシャクと石細胞の梨噛

角

凍

豆

腐

大豆

ഗ

色に

戻

ŋ

け

IJ

里 は丸く山は長 しよ芋の 秋

角 男 爵 の 誉 た ま は る 薯 の 秋

角 編 集 の 加 減 乗除 や文 化 祭

角 **惜気なく栗を潰してゐたりけり**

角 渋柿も熟せば落る朱色か な

角 角 ミサイルのいまは露けき筒の中 五で割つて十一月に余り無 U

角 風かよふ気圧の谷の寒さかな

角 竹林の 外側に立つ竹 の 凍 て

角 角 古 本 堂 池 も や 石 仏 も も 枯 て 開 れ < て 風 氷 強 面 鏡 し

角 角 雑草の生えては枯るる植 みんな家中電気で動く冬籠 木 鉢

17行3段組14ポ 2024年12月12日 23:26

〈1 〉桐10

角 冬眠 大 ١J なる水 の 叶 は 圧 ぬ 鳥 お ほ は 庭 ١J に来 な る 鯨 ょ

角 角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 中元のタオルよいざや年用意

角 年惜しむべく読み返す書ありけり

角 角 福神のひいふう、 灯台は年 中 みいよ、 無 休 いつむう、 初 の 出 な

日

角 紫 も 清 も 遊 び し 双 六 ぞ

角 角 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も 水鳥の真つ赤に冷えし脚二本

角 角 雪の 長き長き雪の列車よユーラシア 山将棋を立てしごと並ぶ

角 雪 国 0) 朝湯に浸る 雪見 かな

角 雪 の 夜 の火事は仏に迫りつ つ

角 灰になり土に紛れて春を待つ

角 角 えんやらやとは浅春の鬼 暖かや赤子は四つ足に進 化

角 蓋とれ ば 内 の 裏 なる内 裹 雛 角

角 その辺に助詞の如くに地虫出づ

見ず知らずの同じ年ごろ入学す

角

角 春塵のつもるつもりや辞書の上

角 電 柱 ഗ 柱 は 丸 春 燈

し

角 角 土龍 万 葉 の穴の壁に貌出す蚯蚓か の 裔 の 百 葉 箱 の 夏 な

角 半袖 の炊事、 洗濯 掃除 か な

角 山火事の迫りつつある大瀑 布

角 角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ 聞 き流す毀 誉 褒 貶 の冷 奴

角 冷房のビル、 家、 車、 広島よ

角 縦 書 の 均 等 割 の 涼 し け れ

角 角 爽やかにテニヲハといふ潤滑油 かりそめの鯖や鰯や秋 0) 雲

角 編 集 の 加 減 乗除や文 化 祭

シャクシャクと石細胞の梨噛

角 里 は丸く山 [は長 しよ芋の 秋

角 男 爵 の 誉 たま は る 薯 の 秋

角

中元のタオルよいざや年用意

角 情気なく栗を潰してゐたりけり

角 角 ミサイルのいまは露けき筒の中 渋柿も熟せば落る朱色かな

角 秋の夜の漢字と仮名と英数字

角 五で割つて十一月に余り無

角 角 ラーメンの汁も飲み干せ神無月 風かよふ気圧の谷の寒さかな

角 竹林の外側に立つ竹 の 凍 て

角 角 古 本 堂 池 や 石 も 仏 も も 枯 て 開 れ て < 風 氷 強 面 鏡 し

角 角 雑草の生えては枯るる植 みんな家中電気で動く冬籠 木鉢

17行3段組14ポ 2024年12月13日 13:25〈1〉桐10

角 角 角 角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 冬眠 凍豆 大いなる水 腐 の 大豆 叶 は 圧 ഗ ぬ 色に お 鳥 ほ は 戻 庭 い な に来 ŋ け る 鯨 ょ IJ

角 角 角 福神のひいふう、 年惜しむべく読み返す古日記 灯台は年 中 みいよ、 無 休 いつむう、 去年今年 な

角 角 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も 紫 も 清 も 遊 び し 双 六 ぞ

角 水鳥の真つ赤に冷えし脚二本

角 長き長き雪の列車よユーラシア

角 雪の山将棋を立てしごと並ぶ

角 雪 国 の 朝湯に浸る 雪見 かな

角 角 雪の 灰になり土に紛れて春を待つ 夜の火事は仏に迫りつつ

えんやらやとは浅春の鬼ヶ島 免

角

角 蓋とれば内の裏なる内裏雛角 その辺に助詞の如くに地虫出づ

角 見ず知らずの同じ年ごろ入学す

角 春塵のつもるつもりや辞書の上

角 電柱の柱は丸し春燈

角 土龍の穴の壁に貌出す蚯蚓かな角 花は葉に赤子は早も四つ足に

角 万葉の裔の百葉箱の夏

角 半袖の炊事、洗濯、掃除かな

角 聞き流す毀誉褒貶の冷奴

山火事の迫りつつある大瀑布

角

角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

角 冷房のビル、家、車、広島よ

角 縦書の均等割の涼しけれ

角 かりそめの鯖や鰯や秋の雲角 爽やかにテニヲハといふ潤滑油

角

大いなる水圧おほ

いなる鯨

角 息合うて水、竹、石の添水鳴る

角 編集の加減乗除や文化祭

角 シャクシャクと石細胞の梨噛る

角

本

· 堂

一も仏

も

枯

れ

て

風

強

U

角 里は丸く山は長しよ芋の秋

角 帯気なく悪い書してもこうけり角 男爵の誉たまはる薯の秋

角 惜気なく栗を潰してゐたりけり

角 ミサイルのいまは露けき筒の中角 渋柿も熟せば落る朱色かな

角 秋の夜の漢字と仮名と英数字

角 五で割つて十一月に余り無し

角

鶴舞ふやその手羽先も手羽元も

角 風かよふ気圧の谷の寒さかな角 ラーメンの汁も飲み干せ神無月

角 竹林の外側に立つ竹の凍て

角 みんな家中電気で動く冬籠角 古池や石もて開く氷面鏡

角 冬眠の叶はぬ鳥は庭に来より るんだまでは 気に

月覚え話しらこぎりょう

17行3段組14ポ 2024年12月13日 17:03〈1〉桐10

角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ角 凍豆腐大豆の色に戻りけり

角 中元のタオルよいざや年用意角 雑草の生えては枯るる植木鉢

角 年惜しむべく読み返す古日記

角 福神のひいふう、みいよ、いつむう、な角 灯台は年中無休去年今年

角 紫も清も遊びし双六ぞ

角 水鳥の真つ赤に冷えし脚二本

角 長き長き雪の列車よユーラシア

角 雪の山将棋を立てしごと並ぶ

角 雪国の朝湯に浸る雪見かな

角 雪の夜の仏に遠き火事ひとつ

角 灰になり土に紛れて春を待つ

角 息合うて水、竹、石の添水鳴る

角 その辺に助詞の如くに地虫出づ 角

えんやらやとは浅春の鬼ヶ島

角 蓋とれば内の裏なる内裏雛 角

角 見ず知らずの同じ年ごろ入学す

角 春塵のつもるつもりや辞書の上

角 電 柱 の柱は 丸し春 燈

角 土龍の穴の壁に貌出す蚯蚓かな

花は葉に赤子は早も四つ足に

角

角 万 葉 の 裔 の 百 葉 箱 の 夏

角 角 半袖 山火事の迫りつつある大瀑布 の炊事、 洗濯、 掃除かな

角 聞き流す毀誉 褒貶の冷 奴

角 角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ 冷房のビル、 家、 車、 広島よ

角 書 の 均 等 割 の涼 しけ れ

角 角 爽やかにテニヲハといふ潤滑油 かりそめの鯖や鰯や秋の 雲

編集 の加減 乗除や文 化 祭

シャクシャクと石細胞の梨噛

角 里 は丸く山は長 しよ芋の 秋

角 男 爵 の誉たまはる 薯 の 秋

角 情気なく栗を潰してゐたりけり

角 渋柿も熟せば落る朱色かな

角 ミサイルのいまは露けき筒の中

角 角 五で割つて十一月に余り無 秋の夜の漢字と仮名と英数字

角 ラーメンの汁も飲み干せ神無月

角 角 風かよふ気圧の谷の寒さかな 竹林の外側に立つ竹の 凍 て

角 古 池 や石もて開く 氷 面 鏡

角 角 み んな家中電気で動 鳥は く冬籠 ょ

角 冬眠 大いなる水圧おほ の 一叶は ぬ 庭 いなる鯨 に来

17行3段組14ポ 2024年12月14日 10:21〈1〉桐10

角 角 角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 豆腐凍てて大豆の色に戻りけり 本 · 堂 一も仏 も 枯 れ て風 強 し

角 角 中元のタオルよいざや年用意 雑草の生えては枯るる植木鉢

角 角 大方はこの家この部屋老の春 灯台の直立不動 初日浴ぶ

角 角 福神のひいふう、みいよ、 紫 も 清 も 遊 び し いつむう、 双 六ぞ な

角 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も

角 水鳥の真つ赤に冷えし脚二本

角 角 長き長き雪の列車よユーラシア 雪の山将棋を立てしごと並ぶ

角 雪 国 の 朝湯に浸る雪見かな

角 雪の夜の仏に遠き火事ひとつ

角 灰になり土に紛れて春を待つ

角 えんやらやとは浅春の鬼ヶ島

角 蓋とれば 内の 裏なる内裏雛

角

その辺に助詞の如くに地虫出づ

角 角 春塵のつもるつもりや辞書の上 見ず知らずの同じ年ごろ入学す

角 電 柱 の柱 は 丸 し 春 燈

花は葉に赤子は早も四つ足に

角

角 土龍 の穴の壁に貌出す蚯蚓かな

角 角 半袖 万 葉 の炊事、 の 裔 の 洗濯、 百 葉 掃除 箱 の か な 夏

角 山火事の迫りつつある大瀑布

角 聞き流す毀 誉 褒 貶 の冷 奴

角 角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ 冷房のビル、 家、 車、 広島よ

角 縦 書 の 均 等 割 の 涼 し け れ

角 角 爽やかにテニヲハといふ潤滑油 かりそめの鯖や鰯や秋 0) 雲

> 角 息合うて水、竹、石の添水鳴る

角 編集 の加減 乗除や文 化 祭

角 シャクシャクと石細胞の梨噛 る

角

本

· 堂

一も仏

も

枯

れ

て

風

強

U

角 里 は丸く山は長 しよ芋の 秋

角 男 爵 の 誉 たまは る 薯 の 秋

角 情気なく栗を潰してゐたりけり

角 角 ミサイルのいまは露けき筒の中 渋柿も熟せば落る朱色かな

角 秋の夜の仮名と漢字と英数字

角 五で割つて十一月に余り無

角

鶴舞ふやその手羽先も手羽元も

角 角 ラーメンの汁も飲み干せ神無月 風かよふ気圧の谷の寒さかな

角 竹林の 外側に立つ竹の 寒 U

角 角 み 古 んな家中電気で動 池 や石も て開 < 氷 く冬籠 面 鏡

角 角 おほいなる水圧おほいなる鯨 冬眠 の けけは ぬ 鳥は 庭 に来 ょ

17行3段組14ポ 2024年12月15日 13:26〈1〉桐10

角 角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 豆腐凍てて大豆の色に戻りけり

角 角 中元のタオルよいざや年用 雑草の生えては枯るる植木 意 鉢

角 灯台の直立不動 初日 浴ぶ

角 大方はこの家この部屋老の いつむう、 春

角

福神のひいふう、

みいよ、

な

角 紫 も 清 も 遊 び し 双 六ぞ

角 水鳥の真つ赤に冷えし脚二本

角 長き長き雪の列車よユーラシア

角 雪の山将棋を立てしごと並ぶ

角 雪 国 の 朝湯に浸る雪見 かな

角 角 雪の 灰になり土に紛れて春を待つ 夜の仏に遠き火事ひとつ

えんやらやとは浅春の鬼ヶ島 角

角

角 その辺に助詞の如くに地虫出づ

角 見ず知らずの同じ年ごろ入学児

蓋とれば内の裏なる内裏雛

角

角 春塵のつもるつもりや辞書の上

角 電 柱 の柱 は 丸 し 春 燈

花は葉に赤子は早も四つ足に

角

角 土龍 の穴の壁に貌出す蚯蚓かな

角 万 葉 の 裔 の 百 葉 箱 の 夏

角 山火事の迫りつつある大瀑布 角

半袖

の炊事、

洗濯、

掃除

か

な

角 聞き流す毀誉 褒貶の冷 奴

角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

角 冷房のビル、 家、 車、 広島よ

角 縦 書 の 均 等 割 の涼 しけ れ

角 角 爽やかにテニヲハといふ潤滑油 かりそめの鯖や鰯や秋の 雲

息合うて水、竹、石の添水鳴る

角 編集 の加減 乗除や文 化 祭

角 シャクシャクと石細胞の梨噛

角 里 は丸く山は長 しよ芋の 秋

角 男 爵 の誉たまはる 薯 の 秋

角 情気なく栗を潰してゐたりけり

角 角 ミサイルのいまは露けき筒の中 渋柿も熟せば落る朱色かな

角 秋の夜の仮名と漢字と英数字

角 五で割つて十一月に余り無

角 ラーメンの汁も飲み干せ神無月

角 角 風かよふ気圧の谷の寒さかな 竹 林 の 外側 に 立 つ 竹 寒 U

角 角 み 古 んな家中電気で動 池 や 石 も て 開 < 氷 く冬籠 面 鏡

角 角 豆腐凍てて大豆の色に戻りけり 冬眠 の叶は、 ぬ 鳥 は 庭に来よ

角

17行3段組1ポ 2024年12月19日 20:57〈1〉桐10

角 角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 水 圧に 咆 哮 も な し 大 海 鼠

角 角 雑草の生えては枯るる植 本 · 堂 も 仏 も 枯 れ て 風 の 木鉢 音

角 角 中元のタオルよ、 灯台の直立不動初日浴ぶ いざや年用意

角 角 この先はこの家この部屋老の春 福神のひいふう、みいよ、 いつむう、 な

角 紫 も 清 も 遊 び し 双 六ぞ

角 角 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も 水鳥の真つ赤に冷えし脚二本

角 長き長き雪の列車よユーラシア

角 雪の山将棋を立てしごと並ぶ

角 雪 国 の 朝湯に浸る雪見かな

角 雪の 灰になり土に紛れて春を待つ 夜の仏に遠き火事ひとつ

の雲

角 角 春なれや助詞の如くに地虫出づ えんやらやとは浅春の鬼ヶ島 蓋とれば 内の裏 角 角 編集の加減 かりそめの鯖や鰯や秋

角 角 雛 壇 の 段差 に 厳 なる内裏 と 階 級 差 雛 角

角 角 春塵のつもるつもりや辞書の上 見ず知らずの同じ年ごろ入学児

角 花は葉に赤子は早も四つ足に 角

電

柱

の

柱

は

丸し

春

燈

角 角 土龍 万 葉 の穴の壁に貌出す蚯蚓かな の 裔 の 百 葉 箱 の 夏

角 半 袖 の炊事、 洗濯、 掃除 か な

角 角 山火事の迫りつつある大瀑 聞 き 流 す毀 誉 褒 貶 の 冷 奴 布

角 冷房のビル、家、 車、 広島よ

角

今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ

角

角 爽やかにテニヲハを書き直さるる 縦 の 均 等 割 の 涼 しけ れ

角

息合うて水、竹、石の添水鳴る

乗除や文化 の 日

角 シャクシャクと石細胞の梨噛 る

角 里は丸く山は長 しよ芋の 秋

角 男 爵 の 誉たまはる薯 の 秋

角 情気なく栗を潰してゐたりけり

角 渋柿も熟せば落る朱色か な

角 角 ミサイルのいまは露けき筒の中 秋の夜の仮名と漢字と英数字

角 五で割つて十一月に余り無し

角 角 ラーメンの汁も飲み干せ神無月 風かよふ気圧の谷の寒さか な

角 竹 林 の 外 側 に 立 つ 竹 寒 U

角 角 み 冬眠の叶は 古 んな家中電気で 池 ゃ 石 も ぬ鳥は て 開 < 動 庭に来よ く冬 氷 面 籠 鏡

> 角 角 角 角 角 角 角 福神のひいふう、 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 豆腐凍てて大豆の色に戻りけり 中元のタオルよ、 雑草の生えては枯るる植木 沈黙の圧縮されし 本 東京に関 · 堂 も 仏 も 東 みいよ、 枯 に いざや年用意 れ 初 いつむう、 て 海 茜 村 鼠 か 滅 か な 泛 鉢 な な

角 角 角 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も 紫 も 清 も 遊 び し 双 六ぞ

角 水鳥の真つ赤に冷えし脚二本

角 長き長き雪の列車よユーラシア

角 雪の 山将棋を立てしごと並ぶ

角 角 雪の 灰になり土に紛れて春を待つ 夜 の仏に遠き火事ひとつ

る

る

角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 土龍 半 袖 花は 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ 春塵のつもるつもりや辞書の上 見ず知らずの同じ年ごろ入学児 日本語に助詞助動詞や地虫出づ えんやらやとは浅春の鬼 冷房のビル、 山火事 秋晴の大手を振つて大手 雛 縦 蓋とれ 聞 万 電 壇 書 き 葉 の穴の壁に貌出す蚯蚓かな の炊事、 葉に赤子は早も四つ足に 柱 の の 流 の迫りつつある大瀑 の 段 ば の 均 す 裔 差 内 毀 等 柱 に の の 家、 洗濯 割 誉 は 裏 頑と身分 百 褒 の な 丸 車、 葉 涼 貶 掃除 る内 し 箱 の し 広 春 け の 冷 島よ の 裹 ケ島 か 燈 差 町 れ 奴 な 夏 雛 布 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 芭蕉忌のプロモーションの時雨かな ラーメンの汁も飲み干せ神無月 ミサイルのいまは露けき筒の中 **惜気なく栗を潰してゐたりけり** 爽やかにテニヲハを書き直さるる シャクシャクと石細胞の梨噛 息合うて水、 五で割つて十一月に余り無 冬眠 風かよふ気圧の谷の寒さか み かりそめの鯖や鰯や秋 渋柿も熟せば落る朱色か 里は丸く山は長 古 竹 男 んな家 爵 池 林 の叶は ゃ の の 誉たまは 石 外 ?中電. も 側 竹、 ぬ て に 鳥は 気で 開 立 石の添水鳴 しよ芋 る く つ 庭に来よ 動 竹 薯 く冬 氷 寒 の 面 の の 籠 秋 秋 鏡 な な 雲

U

U

角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 福神のひいふう、 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 豆腐凍てて大豆の色に戻りけり 雪の 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も 雪 長き長き雪の列車よユーラシア 水鳥の真つ赤に冷えし脚二本 中元のタオルよ、 雑草の生えては枯るる植 灰になり土に紛れて春を待つ 沈 本 紫 東京に の に黙の · 堂 も 山将棋を立てしごと並ぶ 夜 も 清 の仏に遠き火事ひとつ 圧縮され 仏 関 も も みいよ、 東 遊 枯 び に いざや年用意 れ し 初 し いつむう、 て 海 茜 双 村 鼠 六 か 滅 木 か ぞ な Ĭ, 鉢 な な

日本語に助詞や助動詞、 地虫出づ 角

角

角

蓋

とれ

ば

内

の

裏

な

る内

裹

雛

角

角 雛 壇 の 段 差 に 頑 と身分 の 差

角 入 学 の 教 室 の 皆みずしらず

角 春塵のつもるつもりや辞書の上

角

電

柱

の

柱

は

丸

し

春

燈

角 角 土龍 花は葉に赤子は早も四つ足に の穴の壁に貌出す蚯蚓かな

角 万 葉 の 裔 の 百 葉 箱 の 夏

角 半 袖 の炊事、 洗濯、 掃除 か な

角 山火事の迫りつつある大瀑 布

角 角 今生や蚊の腹に血が透けて見ゆ 聞 流 す毀 誉 褒 貶 の 冷 奴

き

角 角 冷房のビル、家、 縦 の 等 車、 涼 しけ 広島よ れ

角 秋晴に大手を振つて大手 書 均 割 の 町

> 爽やかにテニヲハで句の 蘇る

かりそめの鯖や鰯や秋 の 雲

角 息合うて水、竹、 石の添水鳴 る

角 里 は丸く山は長 しよ芋の 秋

角 男 爵 の 誉たまは る 薯 の 秋

角 シャクシャクと石細胞の梨噛 る

角 渋柿も熟せば落る朱色かな

角 惜気なく栗を潰してゐたりけり

角 ミサイルのいまは露けき筒の中

角 五で割つて十一月に余り無

角 ラーメンの汁も飲み干せ神無月

角 角 芭蕉忌のプロモーションの時雨かな 風かよふ気圧の谷の寒さか な

角 角 み 竹 んな家 林 の 外 中電気で動 側 に 立 つ 竹 く冬籠 寒 U

角 角 豆腐凍てて大豆の色に戻りけり 冬眠 の 一叶は ぬ 鳥 は 庭 に来よ

17行3段組14ポ 2024年12月22日 06:40〈1 〉桐10

角 角 角 角 角 角 角 福神のひいふう、みいよ、 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 中元のタオルよ、 雑草の生えては枯るる植 沈黙の圧縮されし 本 堂 東 京 も に 仏 関 も 東 枯 に いざや年用意 れ 初 いつむう、 て 海 茜 村 鼠 か 滅ぶ かな 末 な 鉢 な

角 角 新 紫 年 も の 清 石 も も 遊 て び 開 し < 双 氷 六 面 ぞ 鏡

角 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も

角 角 長き長き雪の列車よユーラシア 水鳥の真つ赤に冷えし脚二本

角 雪の 山将棋を立てしごと並ぶ

角 雪の 夜 の仏に遠き火事ひとつ

角 灰になり土に紛れて春を待つ

の 雲

角 角 角 日本語に助詞や助動詞、 えんやらやとは浅春の鬼ヶ島 蓋 とれ ば 内 の 裏 な る内 地虫出づ 裹 雛 角 角 かりそめの鯖や鰯や秋

角 雛 壇 の 段 差 に 頑 と身分 の 差

角 角 春塵のつもるつもりや辞書の上 入 学 の 教 室 の 皆みずしらず

角 角 花は 電 葉に赤子は早も四つ足に 柱 の 柱 は 丸 し 春 燈

角 土龍 の穴の壁に貌出す蚯蚓かな

角 角 半 袖 万 葉 の炊事、 の 裔 の 洗濯、 百 葉 掃除 箱 の か な 夏

角 山火事の迫りつつある大瀑 布

角 冷房のビル、 家、 褒 車、 広 島 奴 ょ

角

聞

き

流

す毀

誉

貶

の

冷

角 縦 書 の 均 等 割 の 涼 し け れ

角 角 爽やかにテニヲハで句の蘇 秋晴に大手を振 つて大手 町 る

角

息合うて水、竹、石の添水鳴る

角 里は丸く山は長 しよ芋の 秋

角 男 爵 の 誉 た ま は る 薯 の 秋

角 シャクシャクと石細胞の梨噛る

角 渋柿も熟せば落る朱色かな

角 情気なく栗を潰してゐたりけり

角 ミサイルのいまは露けき筒の中

角 角 ラーメンの汁も飲み干せ神無月 五で割つて十一月に余り無

角 芭蕉忌のプロモーションの時雨かな

角 角 風かよふ気圧の谷の寒さかな 竹 林 の 外側 に 立 一つ竹 寒 U

角 角 冬眠 み んな家中電気で 0) 叶 は ぬ 鳥 は 庭 動 に来よ く冬籠

角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 豆腐凍てて大豆の色に戻りけり

> 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 福神のひいふう、みいよ、 雪の 雪の山将棋を立てしごと並ぶ 長き長き雪の列車よユーラシア 水鳥の真つ赤に冷えし脚二本 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も 中元のタオルよ、 雑草の生えては枯るる植木 灰になり土に紛れて春を待つ 沈黙を圧縮したる 新 紫も 本堂も仏 東 年 京 夜 の 石 清 に の仏に遠き火事ひとつ も 関 もて も 遊 東 枯 び に 開 れ いざや年用意 し 初 いつむう、 < て 海 双 茜 氷 村 鼠 六 か 滅 面 か ぞ 鏡 な 泛 鉢 な な

17行3段組14ポ 2024年12月25日 06:55〈1 〉桐10

雲

角 角 角 日本語に助詞や助動詞、 えんやらやとは浅春の鬼ヶ島 蓋 とれ ば 内 の 裏 な る内 地虫出づ 裹 雛 角 角 かりそめの鯖や鰯 や秋 の

雛 壇 の 段 差 に 頑 と身分 の 差 角 男

角 角 入 学 の 教 室 の 皆みずしらず

角 春塵のつもるつもりや辞書の上

角

電

柱

の

柱

は

丸

し

春

燈

角 花は 葉に赤子は早も四つ足に

角 角 土龍 万 葉 の穴の壁に貌出す蚯蚓かな の 裔 の 百 葉 箱 の 夏

角 半 袖 の炊事、 洗濯、 掃除 か な

角 角 山火事の迫りつつある大瀑 聞 き 流 す毀 誉 褒 貶 の 冷 奴 布

角 冷房のビル、 家、 車、 広 島 ょ

角 角 縦 書 の 均 等 割 の 涼 し け れ

角 爽やかにテニヲハで句の蘇 秋 晴に大手を振 つて大手 町 る

息合うて水、竹、石の添水鳴る

角 里は丸く山は長 しよ芋の 秋

爵 の 誉 た ま は る 薯 の 秋

角 シャクシャクと石細胞の梨噛る

角 渋柿も熟せば落る朱色かな

角 **惜気なく栗を潰してゐたりけり**

角 ミサイルのいまは露けき筒の中

角 五で割つて十一月に余り無

角 角 芭蕉忌のプロモーションの時雨かな ラーメンの汁も飲み干せ神無月

角 風かよふ気圧の谷の寒さかな

角 角 み 竹 ん 林 な家 の 外 中電 側 気で の 竹 動 寒 く冬籠 々 ح

角 冬眠 0) 叶 は ぬ 鳥 は 庭 に来よ

角 角 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 豆腐凍てて大豆の色に戻りけり

> 角 角 角 角 角 角 角 中元のタオルよ、 雑草の生えては枯るる植木 白をもて鶴鳴き渡る 沈黙を圧縮し 凡 本 東 堂も仏 々と鳴 京 に 関 る 年 も 東 枯 たる に 越 れ いざや年用意 初 の て 海 茜 掛 村 初 鼠 時 か 滅 御 な 空 計 な تت 鉢 り

角 角 福神のひいふう、 紫 も 清 も みいよ、 遊 び し いつむう、 双 六 ぞ な

角 新 年 の 石もて 開 < 氷 面 鏡

角 角 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も 水鳥の真つ赤に冷えし脚二本

角 長き長き雪の列車よユーラシア

角 雪の 山将棋を立てしごと並ぶ

角 角 雪の 灰になり土に紛れて春を待つ 夜 の仏に遠き火事ひとつ

17行3段組14ポ 2024年12月27日 19:18〈1〉桐10

角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 土龍 半 袖 花は 日本語に助詞や助動詞、 春塵のつもるつもりや辞書の上 えんやらやとは浅春の鬼ヶ島 入 学 山火事の迫りつつある大瀑 蓋 雛 聞 万 電 とれ 壇 き 葉 の穴の壁に貌出す蚯蚓かな の炊事、 葉に赤子は早も四つ足に 柱 の の 流 の 教 段 ば の す毀 裔 室 差 内 柱 の に の の 洗濯、 誉 は 皆みずしらず 頑 裏 百 褒 な 丸 と身分 葉 貶 掃除 る内 し 箱 地虫出づ の 春 冷 の か の 裹 な 燈 奴 夏 差 雛 布 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 芭蕉忌のプロモーションの時雨かな ラーメンの汁も飲み干せ神無月 シャクシャクと石細胞の梨噛 息合うて水、竹、 ミサイルのいまは露けき筒の中 **惜気なく栗を潰してゐたりけり** 風かよふ気圧の谷の寒さかな 五で割つて十一月に余り無 蟷螂 渋柿も熟せば落る朱色かな 里 かりそめの鯖や鰯 男 は 爵 丸 の硬きは の く 山 誉 たま には長 目玉 石の添水鳴る は しよ芋 る や秋 選50句 薯 柔 の な の の 雲 る 秋 秋 腹

角

爽やかなテニヲハに句の蘇

る

角

豆腐凍てて大豆の色に戻りけり

角

秋

晴

に大手を振

つて大手

町

角

冬眠

の

一叶は

ぬ

鳥

は

庭に来

ょ

角

灰になり土に紛れて春を待つ

角

縦

書

の

均

等

割

の

涼

し

け

れ

角

み

Ĺ

な家

中電気で動

く冬籠

角

冷房のビル、

家、

車、

広

島

ょ

角

竹林をはみ出

して寒々と揺

れ

角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角 福神のひいふう、 揚げたてのカラリ仮名書きカキフライ 雪の 雪の 鶴舞ふやその手羽先も手羽元も 長き長き雪の列車よユーラシア 水鳥の真つ赤に冷えし脚二本 中元のタオルよ、 雑草の生えては枯るる植 沈黙を圧縮したる 白をもて 本 堂 凡凡と鳴る年越の掛 東 紫 京 も 夜 山将棋を立てしごと並ぶ も に 清 の仏に遠き火事ひとつ 仏 も 関 鶴 も 遊 みいよ、 鳴 東 枯 き渡 び に いざや年用意 れ 初 し いつむう、 て 海鼠 る 双 茜 村 初 六 滅ぶ か 時 な 御 木 ぞ 計 な 空 鉢 り な